

## 「明治元年」の次郎長

大塚 喜子

明治元年一月、鳥羽伏見の戦で幕府軍は敗れた。

三月、新政府軍は浜松を占領し、駿河一帯の治安の責任を負うことになった。浜松藩家老伏谷如水が侠客・次郎長に出頭を命じたのは、彼の統率者としての器量を熟知していたからだ。

四月、命令を受けた次郎長は「俺は罪多い身だ。当分帰ってこられないだろう」と言い残して駿河に向いた。

如水は次郎長の過去の罪状を残らず読み上げ「全ての罪を不問にする。これからは天朝様の時代である。今迄の生き方を改め、子分や家族共々新たな役目につとめよ」と説いた。次郎長は清水で子分と生きるには他に道がないと判断したが、徳川勲員の地元民は、次郎長は徳川を裏切ったと思っただけに違いない。

五月、江戸攻略の兵站基地であった広大な米蔵の警固を命じられた。任務の傍ら次郎長は、禄を失って、困窮している武士たちを集め、軒を並べる回船問屋を説得して、清水港の拡大工事に取り掛かった。

七月、徳川慶喜が旧幕府軍の軍艦に乗って清水港に上陸、宝玉院に入り蟄居した。随行してきた江戸の侠客・新門辰五郎から身辺警護を引き継ぐと、次郎長は慶喜公にサイコロの打ち方を教え、公から写真の術と英語を習った。

八月、徳川宗家を相続した五歳の家達が、蒸気船ニューヨーク号に乗って数千人の家臣と共に清水港に入港した。次郎長は彼らを「お泊りさん」と呼んで、炊き出しや宿泊所の斡旋に奔走した。

九月「咸臨丸事件」が起きた。賊軍（徳川兵）が乗り込んでいる咸臨丸を官軍（有栖川宮大総監）が攻撃、両軍多数の遺体が港内に浮遊した。地元の誰もが新政府のお咎めを恐れて手を出さないうちで、次郎長は「死ねば仏だ。仏に官軍も賊軍もあるものか」と言い放ち残らず埋葬した。

十二月、新政府の輔弼・岩倉具視が「次郎長に会う」と言った、次郎長は「天朝様なら直ちに伺うが、官軍の頭に会う理由はない」と言い、上京しなかった。地元民はこれを聞いて大いに溜飲を下げた。